



[原著]

ヘンダーソンの基本的な看護構成要素を用いた基礎看護実習における学生の観察の視点の分析

田中 瞳¹、山元由美子²

1) 横浜市立大学大学院医学研究科

2) 前 東京女子医科大学看護学部

要旨

目的：本研究では、看護学生（以下、学生）が初めて患者を受け持つ実習での観察の視点とその変化を明らかにする。
方法：基礎看護学実習Ⅱを履修する学生に、受け持ち対象者（以下、受け持ち患者）の病床を訪問した際に観察したことを「観察記録用紙」に記述してもらった。学生9名が記述した観察記録用紙を分析対象とし、記述された内容を質的に分析した。分析にはヴァージニア・A・ヘンダーソン Virginia Avenel Henderson（以下、ヘンダーソン）の看護理論の項目を活用した。
結果：ヘンダーソン看護理論の『基本的看護の構成要素』は学生にとって患者の動きを捉えやすく観察しやすい項目と、コミュニケーション力が求められる観察しにくい項目があることが明らかになった。学生は実習期間を通してヘンダーソンの『基本的看護の構成要素』の14項目を全般的に記録していた。また、受け持ち患者のニーズの充足・未充足を偏りなく観察していた。学生の観察視野は広範囲であり、実習の進行に伴い、受け持ち患者の状態に応じて拡大あるいは焦点化したり、観察を継続もしくは終了させていた。学生は視覚や受け持ち患者とのコミュニケーションだけでなく、自身の温度覚や嗅覚、触覚を活用して情報を得ていた。

キーワード：学生の観察の視点、看護学生、基礎看護学実習、観察記録用紙

1 緒言

看護基礎教育検討会の報告書（令和元年10月）では、看護師等養成所の運営に関する指導ガイドラインの看護師に求められる実践能力と卒業時の到達目標の改正案が提示されている。これには、『根拠に基づき、看護を計画的に実践する能力』としての構成要素であるアセスメントの卒業時到達目標を「健康状態のアセスメントに必要な客観的・主観的情報を系統的に収集する」とし、提示された改正案では情報の系統的収集が強化されている（1）。看護学の学士課程教育における実習のあり方について、学生が実習で身につけるべき能力として〈現象から発見した課題を論理と結びつけ、意味づけられる力〉、〈語ることができる力〉、〈自立して学習し続けられる力〉が挙げられている（2）。現象から課題を発見し、意味付け、適切な援助を考察するには、現存する事実や事象を意図的に捉える力が不可欠である。このように、学生

にとって観察は習得すべき重要な能力である。

看護実習の方法については、患者の個別受け持ち制が通例であり、これにより、対象とのコミュニケーションの方法や援助的人間関係形成の方法など重要な学習が可能となっている（3）。大部分の大学では1年次もしくは2年次に基礎看護学実習を履修し、学生は患者を受け持つ経験をする。A大学では1年次に基礎看護学実習Ⅱを履修し、初めて一人の患者を受け持つ。看護実践能力育成における臨地実習の意義は、学生は対象者に向けて看護行為を行う過程で、学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りつつ、自ら実地に検証し、一層理解を深め、看護の方法について「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させるために不可欠な過程（3）であり、学生は患者を受け持つ経験を通して実践経験を培うことになる。

学生の臨地実習については、4年次の技

連絡先：田中 瞳
横浜市立大学大学院医学研究科精神看護学
神奈川県横浜市金沢区福浦 3-9（〒236-0004）

2019年10月11日受付
2019年12月13日受理

E-mail: hitomi.tanaka2525@gmail.com

術経験と到達レベルを明らかにしたもの(4)、卒業年次学生の看護技術到達度と臨地実習での経験状況を明らかにしたもの(5)、臨地実習における看護技術の習得状況を新・旧カリキュラムで比較したもの(6)、初めて受け持ち患者を持ち、看護過程を展開する実習での看護技術経験状況(7、8)や技術経験の達成度(9)を明らかにしたもの、その文献検討(10)などであり、いずれも看護技術についての報告である。学生が行った観察内容に着目した報告は、看護師が行う看護活動を捉えたもの(11)であった。また、眼球運動に着目した学生の観察力については、実践能力の高まりに伴う危険予知力の変化を明らかにするために注視時間・注視回数・記憶項目・判断理由に着目して看護大学1年生と4年生の危険予知の特徴を明らかにしたもの(12)、3年生を対象にした静止画面による視線計測とアンケート調査によるもの(13)、眼球運動指標を用いて看護学生の危険認知力と反応時間との関係を検討したもの(14)、看護師・学生の眼球運動と危険予知についての文献検討(15)等がある。場面から情報を捉える力の変化を仮装場面での学年比較で検証した報告がある(16)。しかし、臨地実習での学生の観察視点とその変化に言及した報告は見あたらない。

本研究では、現存する事実や事象を捉える力を観察力とし、初めて患者を受け持った学生が何を捉えているのか、着眼した内容から学生の観察の視点を明らかにした。加えて、実習日数の進行に伴う学生の観察の視点の変化に着目した。学生の観察の視点とその変化を明らかにすることは、学生が受け持ち患者を理解することやアセスメント・看護計画立案の支援に反映できるとともに、学生の成長に応じた実習指導実践の一助になることが期待される。

II 目的

初めて患者を受け持つ実習での学生の観察視点と実習の進行に伴う観察の視点の変化を明らかにする。

III 方法

1. 研究デザイン

自由記述文の内容分析による質的研究デザイン

2. 対象

ヘンダーソンの看護理論(17)について学習し、基礎看護学実習Ⅱを履修するA大学看護学部1年生で同意が得られた23名のうち、病棟で患者を受け持った6日間の全ての日で観察記録用紙に記述した9名の観察記録用紙の内容を分析対象とした。

3. データ収集方法

病棟実習8日間のうち、病院オリエンテーション及び祝日を除いて患者を受け持った6日間を調査日とした。受け持ち患者の病床を訪問した際に観察したことを「観察記録用紙」に記述してもらった。観察記録用紙は、実習日時、実習日数(○日目)、観察した内容の項目が記されており、学生が観察したことを自由に記述する様式でA4用紙1枚(6日分6枚)である。記述時間の目安は10分程度である。看護記録を含む医療記録からの情報や担当看護師の申し送りでも知り得た情報については記述しないことを説明した。本研究では、学生が直接見たこと、学生が聞き取った受け持ち患者の発言、その他学生が用いた方法はすべて観察として扱った。

受け持ち患者の病床訪問時以外に学生が看護師の申し送りや看護記録から得る可能性のある情報については、臨地実習の特性上、回避することはできない。これらの方法で得た情報は、学生が患者を観察するきっかけになりうるが、学生が観察記録用紙に記述する内容は意図的行動としての観察を経たものである。以上のことから、観察記録用紙に記述した内容は「学生が受け持ち患者について必要と判断し観察を行ったもの」と解釈する。

4. データ収集期間

20xx年11月～12月中の6日間

5. 分析方法

観察記録用紙に記述された内容を精読し、記述内容から「受け持ち患者を訪問した際に観察したこと」に該当する部分を抽出し、ひとつの内容ごとに区切ってコード化した。これを研究者がヘンダーソンの「基本的看護の構成要素」の14項目、基本的欲求に影響を及ぼす常在条件、基本的欲求を変容させる病理的状态、その他に分類し、内容を分析した。分析にあたっては研究者間でコード抽出および分類について検討した。なお、分析の信用性を確保するために質的研究に精通した看護学研究者のスーパービジョンを得た。

6. 基礎看護学実習Ⅱについて

A大学の基礎看護学実習Ⅱは1年次の11～12月に履修する。実習目的は「入院という特殊な生活過程にある対象(患者)に対して、より健康的な日常生活への意図的な援助を行い、対象(患者)の看護上の問題を解決するための看護過程展開の基本的能力を習得する。また、その実践体験を通して、看護の目的、役割、機能について理解を深める」である。その中でも個別の患者のより健康的な日常生活に向けた看護

過程展開に必要な全体像を把握するために、患者の基本的なニーズをアセスメントし、看護の必要性を判断するための情報収集に焦点を当てている。そのため、一人の患者を受け持って実習を行う。実習期間は2週間、そのうち臨床での実習は8日間である。A大学の基礎看護学実習Ⅱで学生が受け持つ患者は、「言語障害や軽度の認知症があっても会話が可能で日常生活の援助が必要な人」を条件としている。

学生は基礎看護学実習Ⅱの履修前に看護学概論および基礎看護学Ⅰ～Ⅲ（基本技術論、生活援助論、診療に伴う援助論）を履修している。ヘンダーソンの看護理論については、基礎看護学各論Ⅳで学習した。

先行して履修する基礎看護学実習Ⅰは1年次の6～7月に履修する。実習目的は「基礎看護学で履修した看護の目的及び対象について、実習を通して体験的にその理解を深める」である。乳幼児及び高齢者を対象とし、幼稚園・保育園と老人施設で2日間ずつ実習を行っている。

7. 倫理的配慮

本研究の協力者である学生には、研究目的、倫理的配慮、調査への参加は学業成績とは無関係であること、学術的公表の可能性、協力は自由意志であり、参加の有無や中断による不利益はないこと、プライバシーは保護されることについて文書と口頭で説明し、協力を承諾した者から同意を得た。観察記録用紙の提出は義務ではなく、記述する日としない日があっても良いものとし、説明した。

IV 結果

学生が観察した内容として432コードが抽出された。抽出されたコードをヘンダーソンの看護理論の『基本的看護の構成要素』（14項目）、『基本的欲求に影響する常在条件』、『基本的欲求を変容させる病理的状态』と『その他』に分類した。

1. 学生が観察した項目

学生が捉えた受け持ち患者に関する情報を俯瞰するために、実習日別数的内訳を表1に示す。観察された量を比較するため、抽出されたコードを『基本的看護の構成要素』の14項目、『基本的欲求に影響する常在条件』、『基本的欲求を変容させる病理的状态』、『その他』毎に数値化した。6日間の受け持ち期間で学生が観察記録に記述した内容は『基本的看護の構成要素』に関するものが328コード、『基本的欲求に影響する常在条件』が23コード、『基本的欲求を変容させる病理的状态』が6コード、『その他』が75コードであった。実習日毎のコード数では初日が最も多かった。

『基本的看護の構成要素』の14項目は、全項目が観察されていた。『基本的看護の構成要素』のなかで学生が多く観察していたのは、姿勢・移動（運動）59コード、食47コード、コミュニケーション43コード、睡眠・休息37コード、呼吸33コード、清潔32コードであった。観察が少ない項目は、学習4コード、信仰・思想・価値観4コード、衣6コードであった。観察コード数が多かったコミュニケーション項目の43コードのうち、18コードが初日に観察されていたが、それ以外では初日に偏りは見られなかった。学生が捉えた観察内容の経時的変化は、『基本的看護の構成要素』のうちコード数の多かった姿勢・移動（運動）を表2、食を表3に示す。

『基本的欲求に影響する常在条件』の内訳は、年齢3コード、気質9コード、社会ないし文化的状態3コード、身体ならびに知的状態8コードであった。

姿勢・移動（運動）、食以外の『基本的看護の構成要素』の12項目は項目別に表4、表5に、『基本的欲求に影響する常在条件』、『基本的欲求を変容させる病理的状态』および『その他』の内容は表6に示す。「」は『その他』のカテゴリを形成したコードの代表例である。

『その他』では、学生は、「光が差し込んでいて明るかった」、「ベッド上にはティッシュ（箱ごと）とティッシュのゴミいれが置いてあった」、「ベッドのお布団カバーに食べこぼしが目立つ」など、病室・病床などの〈患者を取り巻く物理的環境〉に関すること45コード、「入り口のところにお嫁さんが立っていた」、「同室者が1人増えて3人となっていた」などの〈患者を取り巻く人的環境〉を捉えた4コード、「点滴を始めて、左手に点滴をしていた」、「顔をしかめることがあった」、「朝食は何を食べたか忘れていた」などの〈その日の患者の状態〉を捉えた16コード、〈その他〉として「今年のお盆くらいから体調を崩し、今回で3回目の入院」、「本日より外泊予定で、ご主人午後迎えに来る」、「髭剃りの音に合わせて『ウーン』と言いながら髭を剃っていた」の3コードを捉えていた。

表2、表3、表4、表5、表6ともコードは代表的なものを抜粋した。

2. 観察内容の継続と変化

学生の観察内容の変化について、例を表7、表8に示す。

学生は前日あるいは数日前に観察したことで、学生自身が把握している状態と異なること、同日内で変化したこと等を捉えていた。学生A（表7）の呼吸についての記述から、初日に受け持ち患者の「呼吸はもうえらくない」の発言を捉え、4日目に「咳

表1 学生が捉えた対象者に関する情報のコード数

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	項目合計	
基本的看護の構成要素								
呼吸		7	4	6	8	3	5	33
体温・循環		1	5	6	3	7	4	25
食		7	14	10	7	5	4	47
排泄		4	3	1	1	1	3	13
姿勢・移動(運動)		15	13	9	8	9	5	59
休息・睡眠		2	10	11	4	4	6	37
衣		0	1	1	1	1	2	6
清潔		3	2	12	7	5	3	32
危機回避		2	1	1	0	3	3	10
コミュニケーション		18	6	6	4	5	4	43
信仰・思想・価値観		2	0	0	0	2	0	4
達成感・成就感		6	0	1	0	0	0	7
遊び・レクリエーション		4	1	1	0	1	1	8
学習		1	2	0	0	1	0	4
基本的欲求に影響する常在条件								
年齢		1	1	0	0	0	1	3
気質		1	4	1	2	0	1	9
社会ないし文化的状態		2	0	0	1	0	0	3
身体的ならびに知的状態		6	0	1	1	0	0	8
基本的欲求を変容させる病理的状态								
		4	0	1	0	0	1	6
その他								
物理的環境		6	10	11	8	6	10	51
対象を取り巻く人的環境		0	0	0	1	2	1	4
その日の対象の状態		4	2	3	3	0	4	16
対象者に関する情報		1	0	1	0	1	1	4
日数別合計		97	79	83	58	56	59	

n=9 総記述数432

が出なくて楽になった」という発言と、実際に咳が少なくなったことを観察していた。2日目・3日目は呼吸についての観察は記述されていないが、4日目には以前に自らが観察した事実と比較して記述していた。また、学生E(表8)は受け持ち患者の呼吸について、1日目は記述がなかったが、受け持ち患者の咳嗽を捉えた2日目には「昨夜から咳」、3日目「昨夜、咳が出て(寝苦しかった)」、4日目「乾性咳で鼻水が出る」と受け持ち患者との会話から情報を得ながら、5日目には「時折咳をしている。乾いた咳である」と咳が出る頻度、どのような咳をしているかを観察しており、6日目には「マスクも咳もしていない」など、

表2 学生が観察した姿勢・移動(運動)の情報(一部抜粋)

学生	実習日数	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
A			横になってTVを見ていた				
B		食事以外は本を読んだり新聞読んだり散歩しているという話しているとき座位だった1日1キロ歩くようにしている	朝の挨拶に行くとおやすみになっていた	仰むけに横になっていた	TAE後行っていないので「デイルームに行って、周りの様子を見たい」		
C		自立した日常動作をしているベッドの上に正座して、挨拶をし、会話中もその姿勢だった背すじもまっすぐしている	膝のおべをしたから正座ができなかったが、ここ2ヶ月くらいで体重が減ってできるようになった	朝の体操の最中だった自分で体位をかえることができる	外泊中、そうじ機をかけたか家事を頑張った「足が筋肉痛よ」		
D		体位は自分ではかえられない様子話ながら右手がうごいていた	手をあげて挨拶を返してくれる腰の所にベルトをして、身体をベッドに固定させていた			左側臥位	ベッドはギャッチアップされていた
E		安静度の制限がないが、ずっとベッド上に寝たままだだった	年寄りだから足元もふらつくね。もう少し元気になったら売店まで行くけど			以前は部屋で環境整備が終わるのを待っていたが、進んでデイルームまで行くようになった	
F		洗面台までは歩いているベッドの隣に杖が用意してあった	朝の挨拶に行く朝食後で起き上がっていた	起き上がって外の景色を見ていた点滴をまだしていなかったの、自由に動いている様子	(いつも朝は起き上がって外を見ているが)今日は寝ていた	布団をかぶって寝ていた	起き上がらず寝ていた
G		ベッドは頭を45度挙げていた	今朝は頭部は挙げておらず、仰臥位で横になっていた	頭を20度挙げて、右の背中に枕を入っていた	頭を20度挙げていた(仰臥位で)	頭側を約35度挙げていて、顔も体も少し左を向いて寝ていた	頭側を約20度程挙げていて、やや右側臥位になっていた
H		話している間、手を動かして髪をいじる仕事をしていた	腕を曲げて縮こまっているように見えた左手後ずっとグーのままになっていた		今日は左向きになっていた	麻痺のある左手を右手で支えながらオーバーテーブルの高さまで持ち上げていた最初のうちは左手はずっとグーの状態で動かすこともしていなかったが、持ち上げて手を開こうとしてた	
I		お風呂後でとても眠そうだった電動髭剃りで自ら髭を剃っていた	ベッドは頭の部分が少し挙がっていた	いつもよりベッドが挙がっていた			髭を剃ると言って髭剃りを始めたが、チューブがあつてやりにくそうだった

咳嗽の状態に加えて、セルフケアに関連する内容も観察していた。患者の状態が変化していく様子を継続して観察していた。食については「食欲不振」という発言を受けて、食欲の前日との比較や食事形態の変化等、関連する情報を捉えていた。

表2~6より、学生は受け持ち患者が自立していることとニーズが阻害されていることの両方を捉えていた。特に患者のニーズが阻害されている部分については、それが短期間であれ長期間に及ぶものであれ、継続した観察を行っていた。

3. 学生が行う情報収集の方法

本研究では、学生は看護師の申し送りや看護・医療記録からの情報ではなく、受け持ち患者について学生自身が観察した内容のみを観察記録用紙に記述してもらった。学生は視覚から入る情報と受け持ち患者とのコミュニケーションから得られる情報を捉えていた。抽出されたコードには、「光が入って暖かい」、「いつもしないような匂いがしている」などを捉えており(表4、表6)、観察は受け持ち患者の病室に入室する瞬間から始まり、病室内の匂いや温かさなどを温度覚や嗅覚を用いていた。また、「手を触れると暖かい」、「(手を触れたところ)昨日のように熱くなかった」等、学生自身が受け持ち患者に触れて情報を得ていた。

表3 学生が観察した食の情報(一部抜粋)

学生	実習日数	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
A	お酒も適度に飲むのが好き		「ご飯もおいしくたべれたよ」		パックの牛乳(未開封)が置いてあった		コーヒーの空き缶が置いてあった
B			好き嫌いが甘いよりしょっぱいのが好き食欲もあまりない食事はゆっくりであるが自立していた 挨拶に行くと朝食は終わっていた		「朝は全部までいかないが、わりと食べた」		
C			今日から50g粥がふえたがちようどよかったが、調子良かった 毎日ほぼ完食 最近はお腹が空いて食事が待ち遠しくなっていた	朝食も完食できた		「お屋は全て食べられました。」	食事もいつもどおり食べられている
D	歯がぬけている		「朝食はおいしかった」と笑顔		「食欲はあったけどゴホンゴホンしてしまったよ」		薬を飲むのが大変で、何度も何度も飲んで口の中に薬が残り、カプセルが口で溶けていた
E	食欲不振だと言っていた 食べたくないが、看護師さんが食べろって言うからご飯半分とプロックリーなどあっさりした物を食べた		食欲がまだわかないが、昨夜の夕食と今朝の朝食は昨日の屋食より調子が良い		食事もご飯からおかゆに変えた		
F			朝食は全部食べた。いつも全部(朝食)全部食べれたよー食べてるよ		朝食「全部食べた」	朝食は全部食べた	全部食べた
G	義歯はしていない 「食事は美味しいとは言えないね」		お茶はあまり飲んでいなかった 「食事は美味しいとは言えないが、食べれた」 義歯はしておらず、歯が数本しかない		朝食は普通に食べられたそう で、昼食も食べられたそう と言っていた		
H			朝食の最中に何度か咽せていた 朝食はあまり美味しくなかった 様子	朝ごはんは美味しく食べられたか訊くとうなずく		朝食は完食 朝食は美味しく食べられたとのことだった	
I			朝食は食べたようだが、あまり美味しくなかったと首を振りながら話していた	朝食はパンは演舞食べたようだが、おかずは今日も食べなかった	ご飯食べれたか訊くと「食べれたよ」と話すが、あまり美味しくないと言った首を振っていた。	食事について訊くといつもは首を縦にうなずくだけだったが、今日は声に出して「食べたよ」と話してくれた	

V 考察

本研究の結果、初めて患者を受け持つ基礎看護学実習で学生は、実習の全期間を通して受け持ち患者を観察していた。既習であるヘンダーソンの看護理論で分類し、観察の視点を検討したところ、受け持ち患者について学生は全般的に情報を得ていた。また、学生は受け持ち患者の状態に合わせて観察の視点を焦点化したり、継続したり、新たな情報を捉えたりしていた。なかでも発熱や呼吸苦など、受け持ち患者に生じている苦痛となりうる現象には、連日焦点を合わせて観察していることが明らかになった。また、学生は視覚情報だけでなく、意図的な行動や質問を通して能動的に情報を得ようとしていることが明らかになった。

これらを踏まえて基礎看護学実習での1年生の受け持ち患者を観察する視点の特徴と実習経過に伴う変化について考察する。

1. 基礎看護学実習で学生が行う観察の視点の特徴

本研究では、学生は受け持ち患者に関する情報を全般的に捉えていた。また、患者についての情報から、病床や病室の環境に至るまで情報として捉えていた。看護師と学生の注視行動と危険認知の比較を行った研究(18)では、学生の注視行動は看護師に比べて広範囲にあり、くまなく危険を

医学と生物学 (Medicine and Biology)

表4 学生が観察した情報：呼吸、体温、循環、排泄、睡眠・休息、衣、清潔（一部抜粋）

項目	実習日数	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
体温・循環		病室が暑いといって自ら窓を開け(室温を)調節をしていた	布団をかけていない窓をあけていた タオルケットをかけていた 昨夜から発熱	顔色も昨日に比べ青い 薬の副作用のため発熱がある 掛け布団は肩のあたりまで掛けていて、今日は寒くないと言っていた 顔色は金曜日と比べて白く見える	「昨夜は熱で苦しかった、気持ち悪かった」 顔色は以前より青かった シーツの下に毛布をしいていたが上にかけているのは布団一枚だけ	足のむくみは少しとれたそう だ (手に触れたところ)昨日のよ うに熱くなかった 爪は右の中指以外はピンク色で、中指は黄土色であった いつもお布団を半分くらいまでしか掛けていない状態だが、今日は上までかけていた	顔色よくいつもより笑顔多かった 顔色はいつもと変わらない 顔色も良、口唇もいつもより赤かった 手を触れると温かかった
排泄		排泄後は自力で病室のベッドまで歩いていった ずっと便秘だったの薬を出してもらったら、うんちどっさり でたよ トイレ(ウォシュレット付き)を利用している オムツを使用している(病室においてあったので)	ほぼ毎日朝に排泄(便)する 今朝はもうトイレに行った 活動はトイレ以外しない	夜間排尿1回	今朝は排便はまだ。排尿はあり	夜間お手洗いにいく回数は3~4回	「便や尿の状態も変わらない」 下痢なし 昨日便秘だったのでお腹の調子は大丈夫か訊くと「もう大丈夫だよ」と答えた
睡眠休息		テレビを見たり他の患者さんと話すこともく、ベッドの上で寝て過ごす 入浴後で眠そうだった。目が細くなって行った	夜もあまり眠れなかったようで、だんだん目が細くなって行った 昨日はよく眠れたか訊くと「よく眠れたよ」と笑顔で話してくれた	夜はよく眠れたか訊くと「そうでもない」と返答 「昨日は安定剤を飲まなかったから2時に目がさめてしまった」 (昨夜咳がでて)寝苦しかった	ベッドに寝ていた。声をかけたら、目を開けてくれた。 普段は目を開けているが、日はまだ眠っていた	(咳がひどく)夜に十分な睡眠が得られない 今夜はよく眠れたとのことで、最近では夜眠れているとおっしゃっていた	(良く眠れたかの質問)「ああ、寝れたよ」
衣		Aさんはまだ病衣だった	昨夜、寝衣を交換したため、新しくなっている。生地が厚い	身だしなみも整えている (口腔内は)毎朝、自分で作った酢水をフラッシュする オーバーテーブルに歯ブラシセットあり 朝食後すぐだったためか、まだ歯磨きができていない、口の中に食物がだいぶ残っていた 自分で洗面台に行って歯磨きしている ベッド上に皮膚の脱落がとても多かった	カーディガンをはおっている	カーディガンを着用していた	「今日は暑いから肌着を脱ぐ」 病衣が汚れている
清潔		イソジンでのうがいも自発的に行っていた 顔面の皮膚の乾燥 腕も乾燥している	「シャワーどうされますか」と訊くと「午前と午後どっち?」と言っていた 朝の方室時は口腔ケアとシーツ交換を終えた状態だった	身だしなみも整えている (口腔内は)毎朝、自分で作った酢水をフラッシュする オーバーテーブルに歯ブラシセットあり 朝食後すぐだったためか、まだ歯磨きができていない、口の中に食物がだいぶ残っていた 自分で洗面台に行って歯磨きしている ベッド上に皮膚の脱落がとても多かった	入院してからシャワーなし はみがき、義歯の清潔はさ れていない 乾燥肌で爪も黒くなっていた (足浴)傷はとくにみられない 昨日から伸びっぱなしのひげがまたあった 16日朝清拭をして、3日間清拭していない やはり口腔の汚れが目立つ	足浴で汚れは余りでなかった 皮膚は変わらず乾燥肌であった 「うがいだけした」とのこと。歯に少し汚れが詰まっていた 目頭に目やにが少しついて いた いつもより口腔内が綺麗な状態 で、講習も気にならなかつた。舌苔もほとんどなくなつた	昨日ほどではないが両目に目やにがついていた 右腕お皮膚が少し乾燥していたが手背はすべすべして おり、温かかった 唾液か痰かは分からないが、口の中で一本糸を引いていた

表5 学生が観察した情報：危機回避、コミュニケーション、信仰・思想・価値観、達成感、遊び・レクリエーション、学習（一部抜粋）

項目	実習日数	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
危機回避		自分の体重を気にしたり、筋力を維持するため室内をうろぐる 歩くようにしているらしい 感染予防の点から部屋から出ないようにしている	窓を開けるなど、より自分が気持ちよく過ごしやすい環境を自ら作り出している	「白血球は胃を抽出してから5年後に半分に減少すると医者から聞いていたが本当にそうだった。感染は不安」	「電話をしてきた」と言っていた 半分に減少すると医者から聞いていたが本当にそうだった。感染は不安	10時前で人が起きている時 聞なのに、マスクもせずに散歩 に行かれた	マスク着用 「家では病院で食べてるものを マネして作るの」
コミュニケーション		右耳の聴力はほとんどないが、左耳で聞き取れるため、コミュニケーションはできる 言葉が理解できたことは言葉を返してくれた 何か伝えようとしたようだが、どうして欲しいのかわからなかった。手を目の上に置いて、少し疲れてしまったのか寝てしまったのか、目を閉じてしまった 難聴であるがこちらの言っている意味はしっかり伝わっている ●さんから話しかけることはないが、私の言っていることにきちんと言事をしてきて、会話が成り立っていた	話しても反対側の方を見て、あまり話したいようではなかった 最初はTVのイヤホンをしていて、話しかけるとイヤホンを外し、座位になってくれた おはようございますと挨拶するとニコニコしながら手を動かしていた 言葉も昨日よりも少しであるがはっきりとしていた。伝えようと一生懸命話してくれた	今日は反応が遅かった 看護師とスムーズにコミュニケーションを取っていた (一生懸命)話を続けていた 今日は今までで一番声ははっきりとされていた	向かいのベッドの患者さんとずっと話している様子 昨日リハビリに行ったことを自分から伝えてくれた 挨拶すると手をあげて「あまり喋りたくない」と口の前でパッテンを作り、首を振っていた	声をかけたら怒ってしまった 笑顔で色々お話をしてくれるようになった 「今日は何をしてくれ るんだい」と笑顔で尋ねてきた ハッキリ口を大きく開けて話す	同室の方とよく会話されている 聞いたことには「うん」と言って 頷く 今までが一番よく喋っていて、笑顔だった。声をかけたら目を開けてくれた
信仰思想価値観		礼儀正しい性格 看護師はとても優しく、よく考えてくれるから嬉しい。声が聞こえるだけで安心する				(治療)先生にお任せしている 何故夜になると咳が出るのか医師に訊いていた	
達成感成就感		畑で農作物を作っているという仲間たちが自分の身を案じてくれていると嬉しそうに話す 自分で髪を剃った後、ちゃんと剃れているか確認して、とても満足そうな顔をしていた		今日も自分で髪を剃ったようで、それを私に見せようとしてくれた			
遊びレクリエーション		ゲートボールの会の副会長をするほどゲートボールが好き 同級生やボランティアの仲間と旅行や食事に行くことを楽しみにしている	NHKの朝ドラを楽しみにしている	今日の4時から外泊が楽しみだと言っていた		床頭台の上には先週まではなかった本があった	ベッドの近くに本があった
学習		薬は自己管理で、どのような症状に効くのかを話してくれた	今日のシャワー浴のことを把握していたり、1日の日程を知っていた 「今日は木曜日」としっかりと曜日感覚があった			新聞を読んでいた	

探索する傾向にあることが報告されている。視線計測システムを用いた看護師と学生の視覚実験では両者の注目エリアは異なっており、看護師は患者の観察時に知識や経験から必要な情報を得るために注視点が限局化しているが、看護学生はまだ患者の観察時の視点が定まっていないとの報告もある(19)。どちらも学生の観察の視線が注がれる範囲は広いことは本研究で得られた結果と同様である。成人看護学領域でシミュレーターを用いて即座に初期対応が必要な状況を設定して行われた学生の観察力の調査において、学生は多くの情報を得ようとする観察行動が報告され、学生の観察力の現状として状況判断能力の欠如傾向が指摘されている(20)。つまり、経験や知識が少ないほど、情報を得るために観察範囲が広範囲になると言える。基礎看護学実習では、学生は受け持ち患者への看護の必要性を判断する目的を持って観察を行うが、観察したいことが焦点化されにくいいため、観察の視点は広範囲に及んだ可能性が推察される。1年次の初回臨地実習でも患者や患者との関係に関心が向き、意図がある学生の発言は、看護学に関する専門的知識が浅いながらも、自分の考えや客観的情報を表明したり、相手とのコミュニケーションを受け取ったことを伝えようとしていることが報告されて

いる(21)。この点から考えれば、学生は疾患や治療から看護介入が必要な点を予測する力は未成熟であるが、受け持ち患者を理解しようとする姿勢から、観察範囲が広範囲になるとも言えるだろう。

ヘンダーソンの『基本的看護の構成要素』から学生が多く観察していたのは姿勢・移動(運動)、食であった。姿勢や食の項目は患者の動きが捉えやすく、初学者の学生には視野に入りやすいため把握が容易であったと推察できる。次いで多く観察されていた呼吸や体温などは、既習のバイタルサインの知識を活用することが可能であり、学生は必要性を理解しているため意図的な観察につながったと考えられる。1年次のコミュニケーション展開の発話の特徴として、コミュニケーションの意図の有無にかかわらず、閉ざされた質問ではあるが、初対面との時に質問することによって相手から情報を得ようとする傾向がある(21)。多く観察されていた食欲や睡眠は、閉ざされた質問として提示しやすく、返答も明確であることが多いため、学生にとって質問しやすい内容であったと言える。学習、信仰・思想・価値観の項目は抽出されたコードが少なかった。3年次後期に行われる精神看護実習で看護場面のプロセスレコードを用いて他者理解と自己理解の計量化を試み

表6 学生が観察した情報：基本的欲求を影響を及ぼす常在条件、基本的欲求を変容させる病理的状态、その他(一部抜粋)

項目	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
基本的欲求を影響を及ぼす常在条件	笑顔は見られない ゲートボールの会の副会長をしている 難聴である とても痩せていた 右目がずっと閉じたままで、左目は白く濁っている 細身の身体 左目の視力はない様子 右耳の聴力はほとんどないが左耳でききとれる	91歳 (病室移動終えたとき)安心した様子だった (病室移動)落ち着きがなかった 表情は少しだけ穏やかだった 昨日より元氣そう	表情は穏やかに見えた 朝食に何が出されたのか訊くと「うーん…、忘れた」と言っているにかなだ	表情は穏やかで、笑みが見られた 表情は穏やかで、笑みが見られた 今日は土曜日? 「電話をしてきた」と言っていた 今日は顔の表情が豊かでした		今日はとても上機嫌で声も良く通っていた。笑顔も見られた
基本的欲求を変容させる病理的状态		意識状態ははっきりしている 上行結腸癌(右半結腸切除)3週間前に手術した 右半身麻痺の影響からか右目が閉じたままだった O型肝炎が原因の肝ガンでTAE目的で入院	治療後、白血球数が減少している			昨日の昼から治療を開始しているが、副作用による症状は出ていないとのこと
その他	病室の窓側で、日当たり、風景がよいベッドの位置であった ベッド上にはティッシュ(箱ごと)とティッシュのゴミ入れが置いてあった 患者を取り巻く物理的環境	カーテンが開いていて日当たりが良かった 窓のカーテンを開けると光が入って喜んでくれた オーバートーブルはベッドの横によせて置いてあった 床頭台のところにエプロンのようなものが掛かっていた シーツが血で汚れていた 朝食をこぼしたしみがかけシーツについていた	同室に昨日と違う患者がいた 光が入って暖かくて「今日も暖かいねー」と話していた 床頭台の下の床に缶コーヒーの空き缶が2本おいてあった ベッド上の間接照明の上にクモの巣がはってあった ベッドのお布団カバーに食べこぼしが目立つ 部屋はいつも整理整頓されていてシーツのしわがない	自分の周りのカーテンはいつも開けているのに今日は閉じたままだった 外が曇っていたのでカーテンが開けられていた 今日はいつもより食べこぼしが多く、昨日取替えたばかりの布団カバーにシミができていた 個室から4人部屋へ移動していた。窓側(南向き)でベッドの位置も以前と同様	曇り、いつもより病室が暗くみえた ベッド上にティッシュをいれている ゴミ箱のようなものがあったが今日はなくなっていた まだ朝食が下膳されていない状態であった 屋には日差しが入ってきた シーツは汚れていなかった	光が差し込んでいて明るかった 病室が変わって光が入ってこなくなった 窓際のベッドに移 床頭台の横に時計がかかっていた いつものような匂いがしている カーテンは半分しまっていて、目の前の患者さんが窓の外だけ見える状態だった
患者を取り巻く人的環境				同室の方はみんな起きていた	隣のベッド方もお見舞いのかたがみえていた 入り口のところに嫁さんが立っていた	同室者が1人増えて3人となっていた
その日の患者の状態	顔をしかめることがあった 点滴をしていた 腹のあたりにベルトをしていた	朝食は何を食べたか忘れていた 「今日は気分がええよ」	刺しっぱなしの針が右腕に付いていた 右手に波りのプレート?を巻いていた	鎖骨の下あたりに数字入りのシールが貼られていた お天気が悪いせいかなぁまり元気な様子が見られない		あまり元気がない 呼吸が苦しいのか少し疲れた表情が伺えた 右胸の上から点滴をしている
その他	今年のお盆くらいから体調を崩し、今回で3回目の入院		本日より外泊予定で、ご主人午後迎えに来る		点滴はしていない	髭剃りの音に合わせて「ウーン」と言いながら髭を剃っていた

医学と生物学 (Medicine and Biology)

表7 学生 A の観察内容

実習日数	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
呼吸	痰がでるので自らティッシュに出して取り除いている 昨日まではSpO2が低いため酸素吸入をしていて、今日からOFFとなった「呼吸はもうえらくない」と言っている			「咳がでなくて楽になった」と言っていたが、実際に咳が少なくなっていた		
体温・循環	病室が暑いという自ら窓を開け(室温を)調節をしていた	布団を掛けていなくて窓を開けていた 病室はあたたかい				顔色よくいつも笑顔多かった
食		「ご飯もおいしくたべれたよ」		パックの牛乳(未開封)が置いてあった		コーヒーの空き缶が置いてあった
排泄	排便後は自力で病室のベッドまで歩いていった 「ずっと便秘だったの薬を出してもらったら、うんちどっさりだよ」	横になってTVを見ていた				
姿勢・移動(運動)				「牛乳を飲もうと思ったがハサミを家にわすれてきて(ストローのピニル)あけられん」と言われたので、ストローの袋を開けて選した ストローをさした勢いで牛乳が少しこぼれてしまった	ベッドの横の椅子座っていた	オーバーテーブル上には空のラベルのほがされた250mlのペットボトルが置いてあった
休息・睡眠		「よく眠れましたか?」と訊くと「熱海の温泉に行った夢を見た」と言っていた	仰臥位で寝ていた 「昨日は安定剤を飲まなかったから2時に目がさめてしまった」 「夜は9時に寝た」			(良く眠れたかの質問)「ああ、寝れたよ」
清潔	インソールでのうがいも自発的に行っていた	「シャワーどうされますか」と訊くと「午前と午後どっち?」と言っていた				
危機回避		窓を開けるなど、より自分が気持ちよく過ごしやすい環境を自ら作り出している		「電話をししてきた」と言っていた		
コミュニケーション	笑顔で会話していた 右耳の聴力はほとんどないが、左耳で聞き取れるため、コミュニケーションはできる	最初はTVのイヤホンをしていたが、話しかけるとイヤホンを外し、座位になってくれた			挨拶すると「今日は何をしてくれるんだい」と笑顔で尋ねてきた	
遊び・レクリエーション	ゲームボールの会の副会長をするほど ゲームボールが好き 旅行が好き		今日の4時から外泊が楽しみだと言っていた			
学習		「今日は木曜日や」としっかりと曜日感覚があった 今日のシャワー浴のことを把握していたり、1日の日程を知っていた			新聞を読んでいた	
基本的欲求に影響する常在条件	右耳の聴力はほとんどないが左耳で聞きとれる ゲームボールの会の副会長をしている					
その他	病室の窓側で、日当たり、風景がよいベッドの位置であった ベッド上にはティッシュ(箱ごと)とティッシュのゴミ入れが置いてあった 床頭台にはコップなどが置いてあった今年のお盆くらいから体調を崩し、今回で3回目の入院	オーバーテーブルはベッドの横によせて置いてあった ベッド上にはティッシュとティッシュのゴミをいれる箱が置いてあった カーテンは半分ほどしまっていた	ベッド上の間接照明の上にクモの巣がはってあった ベッド横にはフェイスタオルが掛けてあった 同室者は2人もカーテンを開けていて、1人は椅子に座り、1人は寝ていた 床頭台の下には缶コーヒーの空き缶が2本おいてあった カーテン全開	オーバーテーブルはベッドの横にある箱ティッシュ、ちり紙いれが置いてあった ベッド横には2枚のフェイスタオルが掛けてあった 同室の方はみんな起きていた	ベッド上にティッシュをいれているゴミ箱のようなものがあつたが今日はない 隣のベッド方もお見舞いのかたがみえかていた 置り、いつもより病室が暗くみえた入り口のところにお嫁さんが立っていた	光が差し込んでいて明るかった 床頭台の横に時計がかかっていた 同室者が1人増えて3人となっていた カーテンは半分しまっていて、目の前の患者さんが窓の外だけ見える状態だった 床頭台・ベッド横の横に1枚ずつタオルがかかっていた

* 衣、信仰・思想・価値観、達成感・成就感、基本的欲求を容れざる病態については記載なし

表8 学生 E の観察内容

実習日数	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	
呼吸		昨夜から咳	昨夜、咳がでて寝苦しかった 夜になると咳が始めるのが何故かわからない	乾性咳で鼻水がでる	時折咳をしている。乾いた咳である	咳もマスクもしていない	
体温・循環		昨夜から発熱	顔色も昨日に比べ青い 薬の副作用のため発熱がある	顔色は以前より青かった シーツの下に毛布を置いていたが上にかけているのは布団一枚だけ	(手に触れたところ)昨日のように熱くなかった	顔色も良、口唇もいつもより赤かった	
食	食欲不振だと言っていた 食べたくないが、看護師さんが食べろって言うからご飯半分とプロッコリーなどあっさりした物を食べた 家族が持って来たメロン、みかん、バナナは食べられた	食欲がまだわかないが、昨夜の夕食と今朝の朝食は昨日の昼食より調子が良い		食事もご飯からおかゆに変えた			
排泄					夜間お手洗いに行く回数は3〜4回		
姿勢・移動(運動)	安静度の制限がないが、ずっとベッド上に寝たままだった	活動はトイレ以外しない 年寄りだから足元もふらつくしね。もう少し元気になったら売店まで行くけど			以前は部屋で環境整備が終わるのを待っていたが、進んでテイルームまで行くようになった		
休息・睡眠		夜はよく眠れなかったが、朝方よく寝た	(昨夜咳がでて)寝苦しかった		(咳がひどく)夜に十分な睡眠が得られない	「昨日は良く眠れた」	
衣			昨夜、寝衣を交換したため、新しくなっている。生地が厚い				
清潔			爪が割れて、指先がとともガサガサしている ベッド上に皮膚の脱落がととも多かった 髪の毛や埃も多く、ベッド上には汚さないようタオルをひいている 「いつも身ぎれいでもいい」	16日朝清拭をして、3日間清拭していない			
危機回避					マスクをしている	マスクをしていない	
コミュニケーション	会話が成立し、こちらの言っていることを理解し応答もきちんとしている 家族に感謝している様子だった 以前は裁縫の仕事をしていた				何故夜になると咳が出るのか医師に訊いていた	同室の方とよく会話されている	
信仰・思想・価値観							
学習		薬は自己管理で、どのような症状に効くのかを話してくれた					
基本的欲求を容れざる病態	C型肝炎が原因の肝ガンでTAE 目的で入院						
その他						窓際のベッドに移られていた	

* 遊び・レクリエーション、達成感・成就感、基本的欲求を容れざる病態については記載なし

た調査では、看護学生は、患者の言動に注目し、自己の言動と内面を自覚しているが、患者の内面へはあまり注目していなかったことが明らかにされている(22)。また、1年次学生のコミュニケーションについては、患者の話した言葉の中に含まれる「意味ある言葉」に学生が気づけない、あるいは言葉の意味を理解できないこと、会話が続きなくなり沈黙が続くことへの恐れなどにより、唐突な話題転換や会話の終了に至ること(23)、相手の反応の解釈ができず対応に戸惑うこと(24)が指摘されている。患者の思想や価値観、自分史などは対象者の内面に触れるため、高いコミュニケーション力が求められることから、学生には難易度が高かったと推察する。

基礎看護学実習Ⅱ(2年次前期に実施)での学生の学びについて、学生は受け持ち患者の看護上の問題を抽出するためには、疾患や治療についての専門的な知識の取得と、個別性のある援助計画が立案できる知識の必要性を感じていたことが報告されている(25)。1年次の基礎看護学実習Ⅱで学生が行う観察は広範囲で、コミュニケーション力が必要な項目は学生にとって観察しにくいことが明らかになったが、このことは実習後の学生の学習意欲に効果的に働く可能性が示唆された。

2. 学生が行う観察の視点の実習経過に伴う変化

本研究では学生が観察した内容を記述した「観察記録用紙」を分析した。前述のように学生にとって視野に入るものは観察しやすく、受け持ち患者が自ら発言した内容や偶然視野に入ったことは受動的な情報の獲得とも言える。シミュレーターを用いた看護学生の術後患者の観察記録を調査した報告では、看護における観察は知識に基づいた観察が求められるため、初めての経験では目にしているにもかかわらずそれが何を意味するかわからないため記述されない観察項目があることを指摘している(26)。これら点から、学生が観察記録用紙に記述した内容は、患者にとって意味あることと学生が捉えていたことを示すと言える。初回臨地実習での学生のコミュニケーション展開の特徴は、実習初日には意図のないまま患者に直面し、コミュニケーションをしていたが、実習2日目・3日目には意図を持ってコミュニケーションをしていること、初日に行う患者との会話にはコミュニケーションの目的が十分でなく、話題は頻りに転換していたが、3日目には意図をもち、看護と結びつけて問題の原因・状況・患者への影響を捉えようとしていたことから、3日間の実習期間内で学生のコミュニケーション展開に変化があったことが報告されている(27)。

受動的に得た情報も観察記録用紙に記述するには学生が必要な情報と判断し、選択した過程を経ている。学生の記述した観察記録には患者の未充足なニーズが連日記述されてきたことから、当初は偶発的な把握であっても、学生が「受け持ち患者に関する重要な事柄」と感じた場合は継続して観察することに繋がっていた。これは学生が必要な項目に焦点化して観察するようになるためと考えられる。連日観察されている基本的看護の構成要素項目を詳細に見ると、学生が捉えた内容は日によって変化していた。新たに追加されたものや、途中で観察されなくなったものがあった。学生E(表8)は患者の呼吸、体温・循環の項目で咳や発熱を捉え、その状態が変化していく様子を継続して観察していた。食欲不振という受け持ち患者の発言を受けて、前日との比較や食事形態の変化やセルフケア状況等の関連する情報を捉えていたが、これは学生が受け持ち患者の状態を捉え、状態に応じた必要な観察を行おうとしているためと推察される。学生はアセスメントをしながら必要に応じて観察内容を変化させていることが示唆され、援助者として適切な観察を行うために不可欠な能力として発展することが期待できる。

本研究の限界

本研究は学生の観察の視点とその内容を観察記録用紙に記述された内容に限定して分析しているため、記述されなかった事柄については分析していない。また、学生9名の観察記録を対象とした質的研究であることから一般化には限界がある。しかしながら、臨地実習で初めて患者を受け持った学生の観察の視点と実習経験による変化が明らかになったことは、今後、学生の状況に応じた学習支援を検討するための資料として寄与できたと思われる。

VI 結論

基礎看護学実習Ⅱでの学生の観察の視点とその変化を明らかにする目的で調査を行った結果、以下のことが明らかになった。

- (1) ヘンダーソン看護理論の『基本的看護の構成要素』は学生にとって受け持ち患者の動きが捉えやすく観察しやすい項目と、受け持ち患者の内面に触れる高いコミュニケーション力がもたせられる観察しにくい項目があったが、実習全期間を通して全般的に観察されていた。受け持ち患者のニーズの充足・未充足に偏りなく観察している点は基礎看護学実習Ⅱで学生が行う観察の特徴である。
- (2) 学生の観察の視点は広範囲に向けられ

ているが、これは実習の進行に伴い、受け持ち患者の状態に応じて拡大あるいは焦点化していた。また、受け持ち患者の状態に合わせ観察を継続もしくは終了させていた。

- (3) 学生は視覚や受け持ち患者とのコミュニケーションだけでなく、温度覚や嗅覚、触覚を活用して情報を得ていた。

謝辞：

調査に協力していただきました学生の皆さんに深謝いたします。

本研究において報告すべき利益相反はありません。

VII 文献

- (1) 厚生労働省.看護基礎教育検討会報告書.令和元年 10 月 15 日. <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (参照 2019-11-21)
- (2) 一般社団法人 日本看護系大学協議会.平成 29 年度 文部科学省 大学における医療人養成の在り方に関する 調査研究委託事業 看護系大学学士課程の臨地実習とその基準作成に関する調査研究報告書 平成 30 年 3 月. <https://doi.org/10.32283/rep.0ca042ea> (参照 2019-11-21)
- (3) 看護学教育の在り方に関する検討会報告.大学における看護実践能力の育成の充実に向けて (平成 14 年 3 月 26 日). <https://www.umin.ac.jp/kango/kyouiku/report.pdf> (参照 2019-10-1)
- (4) 齋藤みどり,手島裕子,川島一喜.各論実習における領域別技術経験値と今後の課題.帝京平成大学紀要.2007,28,p.217-224.
- (5) 佐藤公美子,大塚知子,中村円,鳥谷めぐみ,澄川真珠子,田畑久江,横山まどか,大日向輝美.卒業年次の看護技術到達度別にみた到達率と経験状況に関する調査.札幌保健科学雑誌.2018,7,p.50-54.
- (6) 増満誠,藤野靖博,櫛直美,村田節子,瀧野由夏,松枝美智子,宮城由美子,鳥越郁代,吉田静,坂田志保路,山下清香,阿部真理子,吉田恭子,江上千代美,石村美由紀,吉川未桜,柴北早苗,原田直樹,杉本みぎわ,浦悠子.新旧カリキュラムにおける臨地実習での看護技術習得状況.福岡県立大学看護学研究紀要.2017,14,p.65-73,2017.
- (7) 藤澤望,高橋有里.基礎看護学実習において学生が経験している看護技術内容 過去 10 年間の文献検討より.岩手県立大学看護学部紀要.2019,21,p.9-17.
- (8) 本田由美,升田茂章,青山美智代.基礎看護学実習において学生が経験した看護技術.奈良県立医科大学医学部看護学科紀要.2016,2,p.79-88.
- (9) 久保宣子,小沢久美子,下川原久子,切明美保子,日當ひとみ,清塚智明,古館美喜子,蛭田由美.A 大学の基礎看護学実習における看護技術経験の達成度に関する現状と課題.八戸学院大学紀要.2018,57,p.195-209.
- (10) 吾妻知美,前川幸子,重松豊美,服部容子,阿部朋子.基礎看護学実習において学生が経験した看護技術の現状 「基礎看護技術経験録」の分析から.甲南女子大学研究紀要(看護学・リハビリテーション学編).2010,4,p.105-113.
- (11) 近藤裕子,南妙子.初回基礎看護学実習で看護学生が観察した看護活動からの学びの意義.JNI: The Journal of Nursing Investigation.2006,4(2),p.73-78.
- (12) 大黒理恵,齋藤やよい.眼球運動と危険認識からみた看護大学 4 年生の危険予知の特徴.医学と生物学.2013,157(6-1),p.947-954,2013.
- (13) 光木幸子,當日雅代,天野功士,小笠美春,田村沙織,野々口陽子,葉山有香.看護学生が臨床場面を観察する時のアセスメント力を視覚情報から可視化する試み.同志社看護.2018,3,p11-20.
- (14) 江上千代美,田中美智子,近藤美幸,東あゆみ,坂田志保路,室弥雅子,続米佳子,松本佐登弥,松林史恵,福田恭介.看護場面における看護学生の危険認知力の評価—眼球運動指標の活用—.福岡県立大学看護学研究紀要.2012,10(1),p.13-20.
- (15) 米田照美,伊丹君和,川端愛野,清水房枝,黒田恭史,前迫孝憲.看護学生と看護師のベッド周辺環境の観察力の違い.看護人間工学研究誌.2015,15,p.35-40.
- (16) 船木由香.場面から情報を捉える力の変化—看護学生の学年による違い—.日本保健医療行動科学会雑誌.2016,31(2),p.52-60.
- (17) Virginia A. Henderson: Basic Principles of Nursing Care,1960,湯槇ます,小玉香津子訳.看護の基本となるもの 新装版.日本看護協会出版会,2006.
- (18) 中原るり子,蜂ヶ崎令子,田中美穂,遠藤英子,竹内千恵子.移乗移送動作における看護師と学生の注視行動と危険認知の比較.ヒューマン・ケア研究 2013,14(1),p.21-30.
- (19) 河合千恵子.看護教育における患者観察力習得の重要性.久留米医学会雑誌.2000,63(8~11),p.201-210.

- (20) 河合正成, 棚橋千弥子, 柴田由美子, 福澤大樹, 山口愛. 成人看護学領域における看護学生の患者観察力の調査. 岐阜医療科学大学紀要. 2014, 8, p.43-51.
- (21) 工藤千賀子, 渡部菜穂子, 阿部テル子. 看護学部1年次生の初回臨地実習時のコミュニケーション展開における発話の特徴 再構成記録の分析. 弘前学院大学看護紀要. 2017, 12, p.1-12.
- (22) 山本勝則, 吉田一子, 内海滉. 看護場面における他者理解と自己理解との関連. 保健科学研究誌. 2004, 1, p.27-33.
- (23) 阿部テル子, 工藤千賀子, 渡部菜穂子, 後藤芙優子. 基礎看護学実習における学生の対受持患者コミュニケーションの展開 - 学生と患者の言語的・非言語的表現とその受け止め方の分析から -. 弘前学院大学看護紀要. 2017, 12, p.13-25.
- (24) 阿部智美. 患者とのコミュニケーション困難場面における看護学生の「解説, 問題解決, 感情」との関連. 日本看護研究学会雑誌. 2013, 36(1), p.149-156.
- (25) 河相てる美, 一ノ山隆司, 若瀬淳子, 炭谷靖子. 基礎看護学実習Ⅱにおける看護過程を展開した学生の学びの特徴. 共生福祉, 2011, 6(1), p.47-52.
- (26) 坂田扶実子, 坂本貴子, 福田和美. 看護学生の術後患者の観察に関する調査 術後患者のシミュレータのスケッチ内容の分析. 純真学園大学雑誌. 2018, 7, p.73-78.
- (27) 渡部菜穂子, 工藤千賀子, 阿部テル子. 初回臨地実習における学生のコミュニケーション展開の特徴 受け持ち患者とのコミュニケーション場面の再構成記録の分析. 弘前学院大学看護紀要. 2015, 10, p.13-26.

Analysis of students' observations in fundamental nursing practicum using Henderson's basic nursing care components

Hitomi Tanaka¹, Yumiko Yamamoto²

1) Graduate School of Medicine, Yokohama City University

2) School of Nursing, Tokyo Women's Medical University

Summary

This study aimed to clarify viewpoints and changes to them in a clinical practicum where nursing students took charge of patients for the first time. Students in a fundamental nursing practicum were asked to write down everything they observed in an observation record form when they visited their patients. The written contents of nine students' records were qualitatively analyzed. The results were classified using Henderson's Need Theory comprising 14 basic nursing care components. It became clear that there are components that are easy for a student to capture and observe, such as the patient's movement, and others that are difficult to observe, which require communication skills. The participating students, however, managed to cover and record most of the components during the practicum period. The analyses of their observation records revealed that they recorded both unmet and fulfilled components in a fair manner. The observation range of the students was wide, and as the clinical practicum progressed, it was expanded or focused according to the condition of the patient, and the observation continued or was terminated. The students' observations were based on their sense of vision, temperature, smell, and touch as well as on their communication with patients.

Keywords: Students' observations, Nursing student, Fundamental nursing practicum, Observation record form